

「漢字」の由来・変遷に没頭さ れた大原信一先生



大原信一氏略歴

一九一六年二月六日生まれ。三七年大阪外国語学校支那語部卒業後、京都女子大学教授等を経て、五三年一〇月同志社大学商学部助教授として入社。五七年同教授。八二年同名誉教授。
二〇〇三年五月一七日永眠 八十六歳

先生は大阪外国語学校（現大阪外国語

大学）で中国語を専攻されて、卒業と同時に通訳官として中国に渡った。戦場で「突撃！」を叫んでも若い将校「待遇」の先生についてくる兵がおらず、結局自分が突撃し、その結果被弾して負傷されることになったという令夫人の思い出話は、先生の人柄を実に良くあらわしている。しかし人の命はわからない。先生はその負傷で日本に帰国することとなった。

先生は当初、京都女子大学にお勤めであったが、一九五三年に同志社大学に移られ、八二年に退職されるまでの二十九年間を同志社で教育・研究に従事された。

五九年に入学した私は、中国研究会の顧問をされていた先生に接する機会が多かった。先生の研究室は、弘風館の五階で、南にも西にも窓のある明るい部屋であった。煙草を燻らせながら、ゆっくり

と返事をされていたのを思い出す。

先生には中国語の教授法の著書、訳書、論文も多数あったが、専門は漢字の由来・変遷についてであり、退職後も研究に邁進された。『漢字のうつりかわり』が、先生の名著であった。先生はつい数年前まで資料を求めて車椅子でよくキャンパスに來られた。

先生は在外研究で上海に滞在されていたときに、四人組追放の歴史的事件に遭遇された。その情報を国外通信社経由でいち早くキャッチした先生は、まだ知らない中国人にそれを知らせたときのことを、帰国後生々しく私に語ってくれたが、それを収めたテープは、私の宝物でもある。

先生の八十六年の生涯は、中国が日本による支配、毛沢東による建国、文革、四人組の追放、鄧小平の復権、そして経済成長とまさに激動の時代であったが、先生はその激動を少し離れたところで静

かに眺めていたように思えてならない。それは先生の専門が何千年も続いてきた漢字の変遷であり、その限りで激動の中国現代史は、先生にとつて何千年もの歴史の中の一こまに過ぎなかつたのではなかつたのだろうか。

昨年車椅子で訪れた上海で、先生は教え子らの大歓迎を受けたという。およそ外国のことを研究しながらその地の研究者に大歓迎されるのは、研究者冥利に付きると言えるであろう。

同志社大学を退職後、大東文化大学に長く勤められ、その間学部長もなされた。著書も、もう一冊書かれる予定があつたと令夫人より聞いたが、先生は教育者として、研究者として十二分にお働きになられたと思うのは先生を知る人全員の見解だと思う。どうぞこのあたりでゆつくりとお休みください。

玉村和彦（大学商学部教授）

つらい思い出

大崎義夫先生を偲んで

大崎義夫氏略歴

一九〇六年二月三日生まれ。三十七年京都大学大学院修了後、龍谷大学助教授等を経て、五〇年五月同志社大学教育学部助教授として入社、五二年五月同教授に就任。七一年一月に退職されるまで二十一年間にわたり教育と研究に尽力された。

二〇〇三年六月二日永眠 九十六歳

大崎義夫先生とはすでに三十年の余も昔、入社してほんの数年お付き合いがあったに過ぎない。むろん二十八、九の駈出しと、倍以上も歳の違う大先輩である。先生の前ではなにながなしいつも恐る恐るといった感じになり、それは先生の定年ご退職の時に至るまでずっとそうだったように思う。こう言ってはなんだが先生独特の風貌のせいでもあったか。まん丸な黒ぶちの眼鏡、眉間に刻まれた深く長い縦皺、頑固一徹を思わせるへの字に結んだ大きな口、背筋の伸びた凛としたその姿勢、先生をお見かけするたびに僕は旧制高校の哲学か何かの先生を思った。もちろん僕が本物の旧制高校の教師を知るわけではない。ただ古い小説にしばしば登場する彼らの姿を先生の中に見ていたということなのだ。それでも、どや山本君、元気にやっとなるか、などとたまさか

掛けてくださる言葉はそつけないがそのぶん自然な温かみを感じられて嬉しかった。僕はひそかに先生を敬愛していた。つらい思い出が一つある。ドイツ語教室が先生の定年ご退職を記念して一夕送別の宴をもつことになった。午後の会議が少し長引きそうので、幹事役が念のために予め会場のビルへその旨電話をしておいた。はたして僕らはあれで十五分ばかりも遅れたであろうか、予約席に別のお客が入っているという。幹事の顔色が変わった。いや幹事ばかりではない、僕らみんなの顔が一瞬凍りついたようにこわばった。給仕では話がわからない。しぶしぶ出てきた支配人に温和と通っている幹事役が思いもかけぬほどの激しい見暮で詰め寄った。二十人余りの僕らだったが、しかし世慣れぬ者が海千山千の商売人と五分に渡り合えるわけがない。三、

四十分の押し問答のあげくが、どう埒の明けようもなく、宴あわやぶち壊しという窮地を急遽京極のすき焼き屋の二階に席を得たときには一同ともかくもほっと胸を撫で下ろしたことであった。しかし先生はさぞ悲しい思いをされたことであろう。ささやかといえども生涯一度の記念の宴席である。こんなごたごたの一部始終に当の本人が付き合されるとは、どんなに悲痛な思いで先生はその夜を過ごされたことか。しかし先生はおくびにもそんな素振りを見せず、おそらく僕たちの胸の内を慮ってであろう終始にこやかに振舞っておられた。以来僕は四条河原町の中ほどにあるそのビルに足を踏み入れたことはない。いまだに激しい憤りと深い悲しみなしに思い出すことのできる一大痛恨事なのである。

山本雅昭（大学言語文化教育研究センター教授）

やんちゃ坊主逝く

後藤茂男先生とは学生時代からの付き合いである。同じ研究室の学生なのだからと、先生のご専門である量子力学のゼミに参加しようと専門の違う学生数人で押しかけていったところ、「片手間でやるような奴らは来るな」と追い返されてしまった。その追い返し方が、我々と同世代の学生が文句をつけているようで、「やんちゃ坊主にやつつけられた」印象を持ったものである。当然先生に悪気は無い、研究をするなら一つのテーマに絞って集中した方が良くよと言う、先生なりの指導であったと思う。

瞬く間に十年が経ち、他大学や企業をほつつき歩いてきた私が同志社に着任した後藤先生の同僚になることになった。先生は私の着任を大変喜んでくださり、みんなで食事に行こうと招待してくださいました。このとき判明したことであるが、

先生は大変な美食家であった。その理由をお聞きしたところ、「私は酒が飲めない。酒が飲めないのだから、飲める奴よりはずつと美味しいものを食べないと不平である。従って私は美味しいものを食べないと気がすまない」と言われ、なんとまあ、分かりやすい方だろうと妙に感心した記憶がある。

ゼミ旅行にご一緒した際には先生の高級スポーツカーに乗せていただいた。広い直線道路の赤信号で停車した後、レーシングサーキットの雰囲気よろしく急加速で他の車を振り切り、子供のようにはしゃいでおられた。ゼミ旅行恒例の麻雀大会では学生諸君を滅多切りにして意気揚々、学生は悔しがることしきりである。とは言え、さすがに徹夜はお体にこたえたらしく、帰りは安全運転で送っていただいた。やんちゃ坊主が勇んで遊びに出



後藤茂男氏略歴

一九二五年一月一日生まれ。四九年九月京都大学大学院修了後、立教大学教授等を経て、七五年工学部教授として入社。自然科目主任、工学部教務主任等歴任。九九年に退職されるまで十六年間にわたり教育と研究に尽力された。二〇〇三年八月二日永眠 七十七歳

て、夕方になってくれたの体で家に帰る風情が思い起こされたものである。

先生は目立つことがお嫌いで、あまり人前で意見を仰ることは無かった。しかし、こころ一番、間違いが起りそうな場合にはポイントを押さえて、意見を述べられた。物理教育の運営でも随分先生のお世話になったと感じている。私にも全く指図をされなかつた先生であつたが、大学人の進むべき正しい方向は、言葉の力を借りずに教えてくださったように思う。先生のように純粋に人生を楽しみ、学生諸君と共に学園を育てていける人間になれるかどうかは、我々の努力にかかっているであろう。心から先生のご冥福をお祈りします。

和田 一元（工学工学部教授）

多才な研究者

— 岩本国三先生を偲んで



岩本国三氏略歴

一九一六年一月九日生まれ。三六年私立電気工学講習所卒業後、京都市立大学工学部電気工学教室助手を経て、五二年同志社大学工学部助教授として入社。五三年四月同教授。工学部教務主任等歴任。七七年一月永年勤務者として表彰を受けられ、八五年定年退職。
二〇〇三年八月一七日永眠 八十六歳

岩本先生が昨年の八月十七日に八十六歳で亡くなられました。先生は電力系統、パワーエレクトロニクス回路等、電気工学分野全般にわたって回路現象の解析および解明をいち早く行ってこられた草分け的存在でした。また多才な研究者であるばかりでなく、一九八五年にご退職されるまで、三十四年間の長きにわたって工学部の教育研究の発展に多大の貢献をされました。

先生は小柄ですが、がっちりとした体格をしておられました。若いときには体操をされていたとおっしゃっていました。またダンスもされていたとのことでした。先生のゆっくりとそして踊るような優雅に歩かれる姿は、多くの方々の記憶に残るところと思います。

現在の工学部電気・電子工学科のカリキュラムは電磁気学、電気回路学を柱と

しています。当時はそれらを電磁気学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと分類していました。これら現在のものに対応させるとⅠが電磁気学、Ⅱが電気回路学、Ⅲが分布定数回路論、電磁波、過渡現象論に対応します。先生はなんと一時期、それらのすべてを担当されておりました。先輩諸兄から、先生の電磁気学、電気回路はしんどかったがよくわかったという話をいまだによくうかがいます。残念ながらしかし幸運にも私は学部三年次生のときにそれらの一つのみですが電磁気学Ⅲを受講することができました。最初の講義は電信方程式の導出であったように思います。その導出と解説の鮮やかさに感動し、以後もその感動は続いたように思います。

このようなことで私は先生の電気回路研究室の門をたたくこととなりました。コンピュータによる回路シミュレーション

を主に行っている研究室でしたが、当時は計算機環境が現在のように恵まれておりませんでした。そのため先生は計算機センターまでよく通っておられました。私も院生や助手の時代に同センターに通う機会が多くありましたが、当然そこで研究に励んでおられる先生をよくお見かけいたしました。時々「がんばっているかね」と先生独特のトーンで励ましの言葉をいただいたことをよく覚えています。先生から直接のご指導をいただくこともありましたが、多くは先生のそのような研究姿勢や論文から学びました。そして私にはたつぷりの研究時間と環境を作ってくださいました。教育の基本原則は感化にあるとも言われますが、まさにそれであったように思います。

先生のご冥福をお祈りいたします。

加藤利次（大学工学部教授）

学生から慕われつづけた 奥田 聰先生を偲んで



奥田 聰氏略歴

一九二二年九月二〇日生まれ。四五年八月旅順工科大学機械工学科卒業後、京都大学助教、愛媛大学教授を経て、六二年六月同志社大学工学部教授として入社。六七年大学院工学研究科博士課程指導教授に就任。九三年同名教授。九九年勲三等瑞宝章受賞。
二〇〇三年九月一日永眠 八十歳

思い返せば、大学三年の四月、当時の新町校地までブラブラ歩いて授業に向かっているとき、大柄な紳士が大股で抜いて行きました。遅れて教室に入るとその紳士が大きな声で授業をされています。入学以来、あまり熱気を感じることもなかったことあつて、そのとき以来、おっかけ（追っかけ）で、四十年程を過ごさせてもらうきっかけとなった奥田先生との出会いでした。多くの研究室が先生のご自宅に入入りさせてもらってききました。卒業後も正月の二日は年賀に訪ねては近況報告と先生の話をお聞きするのが習わしでした。

先生の基本的姿勢は研究とその社会的還元ではなかったかと思えます。成果の発表は国内に留まらず、海外にもよく出掛けられました。その延長上で、学会で重んじられ、次々と要職に就かれました。ご多忙であつても、研究室を大切にされ、コンパの席では奥研首頭と英語版

“万歳三唱”で締め括るのが常でした。奥研首頭は研究室一期の根来先輩の作詞・作曲によるもので、研究室立ち上げの頃の様子がよく表れています。同志社を退職された古希のときにホテルで催されたパーティーには各地から二百五十人を超える研究室卒業生が集まり、会場が一杯になりました。喜寿のときには先生の方から招いていただきホテルで賑やかに祝わせていただきました。

私は先生が最後に発表された論文のこととは詳しく知りませんが、最後の学会講演は二〇〇二年にスペインのカナリア諸島での国際会議でした。この時の異常な暑さが結果的には先生の命を縮めることになったようですが、それでも本望でなかったかと今では思っています。私のお手伝いは二〇〇三年四月に雑誌社からの依頼原稿が入院で書き難くなったので、連名での執筆を頼まれたことです。先生から指示のあつた内容に最近の進歩

を加えた原稿を五月の連休に書いて、ペッドで読んで貰いました。

フォードがガソリンエンジン車でT型フォードの大量生産を開始したのが、二十世紀はじめでした。二十一世紀に入つた今では、燃料電池車が萌芽期です。奥田先生の進めて来られた高分子材料の実用化研究でも同様のことが言えるのではないのでしょうか。先生は戦後まもなくの石油化学勃興の初期から研究に携わつてこられました。高分子材料の進歩は少しずつ続いてはいますが、一般的な高分子材料では、大きな流れは再生可能な高分子材料の萌芽期に差し掛かっているように思えます。

一つの時代が終わりました。後に続く者は先人の肩に立たなければならぬと言つても先生の教えの一つにありました。

井口高行（奈良工業高等学校教授）

正義は愛に先行し、愛は正義を全うする

— 嶋田啓一郎先生を偲んで



嶋田啓一郎氏略歴

一九〇九年二月五日生まれ。三十五年同志社大学文学部神学卒業後、三十五年同志社大学文学部助手として入社。四十六年同助教授、四十八年同教授に就任。この間文学部長を務める。八〇年同名誉教授。また法人評議員・理事・監事として学校運営のために尽力された。
二〇〇三年九月二四日永眠 九十三歳

先生は、姉と弟を持つ五人きょうだいの長男として金沢市に生まれた。ご尊父はプリを獲る網元漁師であったという。そのせいか、かつてのご趣味は魚釣りであったらしい。五十年におよぶ半生以上を同志社に捧げ、最初から最期まで同志社人として生涯を全うされた。

先生は、同志社大学文学部社会学科社会福祉学専攻の育ての親であり、かつ同志社大学社会福祉学会の生みの親でもあった。その高潔かつ真摯な学究態度は、我が国の社会福祉学界において不滅の金字塔であり、「嶋田理論」として名高い社会福祉理論を編み出した。社会福祉学界の「大御所」として、「社会福祉といえは同志社」といつて世にはばからない、同志社社会福祉の学統の礎を築かれたのである。先生は、多くの人から尊敬され慕われたが、敬虔なクリスチャン（日本キリスト教団向日町教会会員）として誰をも愛された。単なる机上の空論には満足せず、

日本キリスト教社会福祉学会会長として、キリスト教と社会福祉実践の接点を福祉現場や福祉教育機関に求められた。また、恩師賀川豊彦から受け継いだ灘神戸生協（現在「生協コープこうべ」）の理事（在任四十年、顧問歴任）、さらには全国大学生協連合会会長として、理論

と実践の統合にいそまれたのである。先生ほど、心から深く同志社を愛した人は他にいない。同志社に学ぶ者は、誰でも等しく「新島の子」であるという。講演で学生時代に深い感動を覚えたエピソードに触れた際、こみ上げてくる感激と涙で声がつまり、中断したこともある。それは、同志社が輩出したキリスト教社会主義者の安部磯雄が、赤レンガの同志社チャペルで、新島襄の遺影を背に「わたしは人生の長い道のりを『安部、お前をよくやっただ』と新島先生から一言いつてもらいたいというただ一念で戦ってきました」と涙に咽ばれた時である。先生

はじめ、居並ぶ学生らは皆等しく泣いたという。安部の姿に「人生の荘厳さに正面から真向かっていこうとする同志社人の真髓」を見たという。先生の人生はまぎれもなく、安部のと同様、新島襄から「お前はよくやっただ」と賞賛されるにふさわしいものであった。

「思想家とは、まことの死に場所を求めゆく人の姿でなければならぬ。人はただに文献の著述によって思想家たり得るのではなく、その生涯の生活的実践を通して、彼の学究的態度の広さ・深さ・高さを実証する。思想は生活であり、学問はその人の死場所と深いかわりをもっている」（嶋田啓一郎「社会福祉体系論」ミネルヴァ書房 一九八〇年 六六頁）
「げに信仰と希望と愛と 此の三つの者は限りなく残らん 而して其のうち最も大いなるは愛なり」（コリントの信徒への手紙一第十三章十三節（先生の愛唱聖句））

横山 穰（北星学園大学教授）

大きな一枚岩

網島先生を偲んで



網島長明氏略歴

一九一一年五月一日生まれ。三六年同志社大学法学部経済学科卒業後、台湾總督府交通局鉄道部等を経て、五二年同志社中学校教諭として入社。六三年から六五年まで中学校教頭を務められ、七七年退職されるまで二十五年間にわたり尽力された。

二〇〇三年一月二日永眠 九十二歳

大きな一枚の岩板もしくは大草原のバツファローにも似た人が綱島先生でした。私が先生に初めてお会いしたのは東京オリンピックの後で、ラグビー部の顧問をされていました。日常は言葉少なく、授業ではバレーボール、マット運動を指導されていました。さて教科の話に入りますがグラウンドはともかく、体育館は大変なところでした。戦後、京都市内で一番早く作られた体育館という事でハンドボール大会が行われたと伝えられた代物ですが当時はすでに老朽化が激しく、明り取りの窓ガラスは多く割れて、雨風が吹き込んでいました。常に教員室と器具庫は砂でざらつき、器具などは砂をかぶっているようでした。教員室の中は青柳先生が、外の器具庫は綱島先生がいつも片付けと整頓をされていました。学習や行事に使う用具、道具は常に使い易くきちんと管理をしないと次の使用に間に

合わなくなるのですが、この用具の管理がまた大変でした。体育祭で使う陸上競技の発走の銃を使用した後、綱島先生が一人で分解、硝煙を磨き取り、元通りに組み立てるのがお上手でした。そういえば昔ですからどこでも教材はほとんどが手作りの時代でした。さて、話を学校の外に移します。実はこれからが先生の先生活たる様子を話すことになるのです。多くの皆さんの知られていることは、先生はお酒が大変お好きであったということです。今出川枳形道の小店で酒の香を買ってその近くの造り酒屋へ入ります。お店に入ってコップになみなみと、一口のどに、そして、「甘露、甘露」「生き返るねー」です。多くの教職員が分け隔てなく、気持ちを変えることができたのは大いに綱島先生の、気さくさにあったと思います。定年前の年は担任を持たれ、孫のような生徒たちと楽しそうにお話をさ

れていた様子が思い出されます。いつまでもわたしたちの心に先生の姿、そしておいしそうにお酒を飲まれている様子が語り継がれることでしょう。

表に出ることがお嫌いでしたが常に学校の財務や人事、学校の将来を考えておられました。もともと経済学科を卒業されていたので当然といえば当然ですが、多くのことを教わりました。教師は担任とクラブと教科のことをしっかりとすることというのでした。寂しくなりますが、先生お休みなさい。ありがとうございました。

池田陸男（中学校教諭）